

龍風柳多留全集八

自一〇〇篇
至一一二篇

岡田甫校訂

誹風柳多留全集八

自一〇〇篇 至一二二篇

三省堂刊



誹風柳多留全集 八

定価 五八〇〇円

昭和五十三年一月十五日 第一刷 印刷
昭和五十三年二月一日 第一刷 発行

校訂者 岡田 甫（おかだ・はじめ）

発行者 株式会社 三省堂 代表者 上野久徳

発行所 株式会社 三省堂

〒一〇一東京都千代田区神田神保町一の一
電話 東京（〇三）二九三―三四四一（代）
振替口座 東京六一五四三〇〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

誹風柳多留全集 八

目次

誹風柳多留

百篇	一
百一篇	三
百二篇	兇
百三篇	七
百四篇	一〇
百五篇	二七
百六篇	一五

百七篇	二九
百八篇	三〇
百九篇	三七
百十篇	三五
百十一篇	二七
百十二篇	二〇

第八卷編集メモ

柳
多
留
百
篇

文
政
十
一
子
年
刊

末廣大會之續 柳樽百編

.....【100・扉】*

(此上を 千本も しけれ 百柳 管子)

少子 百柳

あけれ 管子

虫が織り出し野山をにしきにし
身中の虫いもりだと知^{さ(九七)}ったふり

いゝ理屈蚊の字にブンの聲があり

秋の蠅しきりに拜^ム蓮の飯

おまんこのほとりに蛸ハ口があり

蛸はらみ天窓へ^ルいはた帯

けつするにこまるハ牛の痢病なり

牛の御ぜんハ豆腐やの桶になり

象の鼻息うずを卷^{△(九九)}やうに出^{ル(九九)}テ

.....【100・12】

慈悲をすりや尿をたれてるまぐれ猫

大津かべみれバ京間の上^リ口

かはいゝ子にハ旅でもと薬喰^{ひ(九七)}

戀瘦に鱷さかせるすぢ違^ヒ

字余りの催馬樂うたふ下の関

愚おもへらく末摘花ハにはふ宮

すこゝとやつては片目ねむる矢師

四ッ切の路次を間男やつとわけ^(九七)

災イハ下^タ三寸のもので出来

橘 四

重 丸 (九七・39)

巨 眼

巨 目

木 賀

佃 (九八・66)

多 居

笹 鯉

綾 丸 (九八・119)

風 松

花 菱 (九九・93)

魚 交 (九七・40)

千 之

杜 蝶

千 之

古 扇

扇 風 (九九・93)

雞 肋

小よ衣洗たく二度の色直し

安ヌ女房わきぜうもんへ帯を^めめ

光陰にやの字の帯を前でしめ

張リ手の多^サ新富といふ^ツ藝者^(九七)

羽織の弁天江のしまを唄^ツて^(九七)

歸リには人買となる梅若忌

葛袴まで七草の數に入^レ

兜鉢むいた鎧を入^レて出し

川と池水から秘佛二鉢上ヶ

……【一〇〇・122】

鳥の傳受も日本記に古今集

淺岡と犬公雀^{イヌキ}の子をそだて

樹下ハ花屋で石上ハ足袋屋也

萩は尿立小便ハ柳かげ

湯と水になる道成寺道明寺

似て非なり桐に鶏竹に猫

其外ハ座頭ハみんな目くら也

なけ聞ふなどゝ楠目見えなり^{させ(九七)}

在鉢一句打越て戀無常

糸人

綾丸

風松

春駒

狸声^(九七・6)

巨眼

よしほ

集馬

子安

花蝶

一之

柳泉

魚遠

集馬

文志^(九八・64)

升丸

眞山^(九七・32)

魚交

まだきになけど脊むけたけちな晩

御急^キの時物かハとはかり召^シ

中ノノ手に葉でうかむ赦免狀

爰なめりかしこなめりと青砥下知

不仁者の樂しむ山ハ度々はつれ

仁和寺の納所山師を叱りつけ

あじくハ馬のすそする頃に賣^{り(九九)}

其角までぬれる經師の刷毛の雨^{が(九八)}

蠅を打へらも末世に名を残し

……【一〇〇・123】

千魚の砂で信友の義を磨^キ^{眞(九七)}

鯉ぶしハ土佐日記にも書きのこし

是と非とをよく聞分て耳袋

表理空言は哥袋白うるり

元輔が袋へ哥の種を入れ

極密を知り竹光で参内し

夜半の鐘しぼつて出ぬ乳へひゞき^{△(九九)}

極々片鄙人別帳に團十郎

繼子ハ寐せぬ碁の片手うち

松歌^(九八・58)

竹子

其成^(九七・24)

巨眼^(九七・24)

迎茂

叶^(九九・105)

柳葉^(九八・68)

よし丸^(九七・29、よしほ)

木賀^(九七・16)

柳水

コセイ

一之

コセイ

笑丸

水鏡

春駒^(九九・92)

卅

張^ツて居る乳ハ菊岡と[△]奈が岡

鹹^{カイ}立てゝ祭りをわたす加田の浦

唐の下女^{ハルシヤ}草ほどひびがきれ

唐人の惡友ハ虎と欠^ツくら

裏ハ綾瀬表は花のにしき也

隅田の花筑波ねつみの裾もよう

信玄の下知くゝむかで觸れ廻り

姉川で織田めにならぬ妹婿

御味方もはらにすゑかね石を投げ

.....124

振^ル光^ル鳴^ル眞鍮のすゞの音

桃喰た口吸による松の下

朝夕人^ンハ御穢で身をこやし

愛岩^(岩)から平川へ飛^フ鉢の梅

鷺の森門徒鳥になるところ

ついでに茶釜も出てたもれ郭巨

非をけて恩^(の)にあかるきやみの櫻^{サキ}

姫は蜘蛛^{クモ}ハ蝶がみちしるべ

手ぬぐひや薪屋光明様御用

迎 茂 (九八・42)

登志丸

己

木 馬 (九七・22)

木 卯

青 志

全 (九八・50)

迎 茂

品 能

貫 雨

青 波

早 牛

辻 木

木 賀 (九八・115)

叶 (九七・12)

木 賀

青 志 (九八・115)

目でころす罪は佛も説もらし

六祖は搗に大日ハといでゐる

雷も天狗ももとハ雲の上

内陣^ンのおみきにしんと晝間の蚊

延喜の代恐れる出^(マ)臍さくる鼻

神勅のわけ清らかに奏^(奏)問し

間に合^ズうかやくと御産こゑ

素盞^(素盞)鳥も舅ハ足手がらみ也

其事^{大尾}ハ天上天下弓削と久米

.....125

春 駒 評

恐悦^サ七十五日御別席

松徳大樹の御作なり高まくら

曲らねバ迷ふ事なし人の道

むかふ見る氣に成て知る親の恩

イザまづと來儀をゆづる麟と鳳

建た碑をよく居^ツたと石屋ほめ

古池やこれハ偽筆とマアかハズ

聞ながす人のハとらぬ言は質^{シチ}

花々丸 (九九・87)

一 之

幸 司

清 屎

佃

迎 茂 (九七・8)

是 也

杜 蝶

雀 丸

五 毛 (九七・36)

三 輔

佃 (九九・97)

和 國 (九七・19)

礫 川

集 馬

玉 兔

■

是も亦ア、と書たき柳子の碑

梅若にのつと碑のたつ柳かな

實語教孝灵前の作ならん

うつちやッて看板にするむらさきや

邪尸になるたゝんで仕まへ朝のぶら

吉兵衛居九七のある評判記貳朱でかひ

事灸に及び團十郎ハにげ

ヤイ喜助身ハ宅番に來ハせぬぞ

揃△九七ッて腹餅引船の綱がきれ

……【一〇〇・126】

芦久保を手のくほどな御うつり

茶でかへす客へ海道湯漬出し

ホイ是ハしたりと足袋△九七の紐をとき

重忠が詮議吟味九七の筋も桐紫檀

君こたらす片糞への玉子とぢ

十年ハおつす九年ハほつすなり

氣にかけて後の小言もむすこ聞キ

ひまな事紺屋やくそく通り出來

鱸から潮の間イが二十年

礪川

芋洗

鼓

綾丸（初・38）

小丸

風松（三二・37、雨譚
九七・19）

三輔

佃（九八・66）

木馬（九七・7）

閔守

魚遠（九八・48）

芋洗（九七・37）

丸

古扇（九八・77）

青凌

菅子

木卯（九七・11）

雲の下人狂哥をし前句をし

はくまでも吞む（九九）ハ愁の玉簪

泥ぼうの糞をにらんで立△（九七）チのまゝ

大屋さん月行事でハ寺のやう

生酔の女房寐ごゑで礼を言ヒ

むすこのひるね晩にゆく當チが有リ

閨の妙手で金と成る（六三）ス三會目

ふる雨と賣る（六三）飴傘のうへと下タ

奴おかべがおいしいと妾ぬかし

……【一〇〇・127】

爰を踏みやあすこがあがる搗米屋

鉢の木を土へ移して御返礼

せり呉服二ふく半ほど脊負て來る

字に書た鼎もどふか踊リそう

ぬれて來てかるくなるのハ合羽箆

頬杖で貧を苦にする不如意輪

富は是一生の財なくす種

蒲やきも筋目正しき二本ざし

日本（九七）の手長とう／＼嶋へゆき

藤波

杜蝶（九九・92）

百太（九七・4）

△廣

豆泉（三六・33、機至）

五毛

其成

■（六二・15、雨旦）

春喜（九七・22）

升丸

居遊（九七・1）

里鳥

里扇

■

木賀

株木

ヤセン

一之（九七・4）

梅干をはがして仕まふすいた客

皮切リハ釜屋ハいやとお七言ヒ

大肌をぬいて小はだをいせや買ヒ

ぬからぬ藝しや足元をみてころび

其鼎古かねが又買ヒかぶり

豆とつくりどつちらもかたき役

医者出世藪から棒の四枚がた

咄し家は世間シのあらで飯を喰ヒ

居ハ口と草履がおなじもの

……【100・128】

御門番藤八最初びつくりし

最期屁で一番いゝは麝香猫

中り芝居に  屋のあし手書

十目の「差所直の文字」

大味ナでないと女帝の御満悦

黒髪も芙蓉も姫氏に目だつ山

太^{大尾}くないやつを縛^{バツ}する肥後守

礫 川 評

大陽^{タイヤウ}の東に氣ざす寅の刻

梶 井

貞 亀 (九七・22)

猿 松

早 牛 (七一・20、尾長)

南 豊 (九八・78)

よしほ

里 鳥

木 馬

丸

文 水

△ 廣

松 鱸

我 虫

■

杜 蝶

柳 泉

狸 声

御神威高し法^イの徒も鬢かづら

ながれゆく哥せきとめぬ御恨み

我朝の湊川にも墮^ダ涙の碑

靜謐にぬる夜も安^{キミヤク}君臣

山は酒海は名哥の御神恩

名も筭^{ソウナ}を雪に得し孝の徳

雲あまでのぼる月毛の駒迎ひ

万葉ハわくら葉もせず落葉せず

不二山が衝^{ツキ}立らしい秋津國

……【100・129】

もみぢ踏わけて螢も一度なき

何時と女三の宮に御たづね

おもひきや門シに家老の居やうとハ

兄弟の名高^キ富士と首陽山

宗匠にあすならふとて檜笠^{木(九九)}

天然ともゝのこびある西王母

三鳥の一羽ハ爰にすみだ川

雷イハ晴レ石碑へ孝の袖のあと

碑の建も回忌に丁度むかふじま

青 志

水 魚

山 笑

吳 竹 (九八・48)

辻 木

帆 布

三 輔

白 峨^{我(九七)} (九七・32)

梅 丸

山 猿

仕 侯 (九八・43)

居 遊

錦 袋

巨 眼 (九九・105)

雪 下 (九七・10)

笠 水

古 京

要 宜

三十どこかト文字で名の高イ哥

ありがたさ子供東をまつおぼえ

十かへりもお諫メ申小松殿

よい名所かもめも住めバみやこ鳥

すゑ廣く朽ぬあふぎの象牙骨

埋れぬ名は宝井と柄井なり

すゞ風になるのが秋の三番叟

床の雨鳳凰雪にする氣なり

ハッ頭妹を喰ふ氣で酒をのみ

……【100・130】

ひつくり丸ハ物かハと樽でつぎ

猪おどす引板ハ山家の小よ碓

江戸を的矢を入り船の八挺ッ船

月の宴仕まうてたべと下の関

覆水と借金盆にかへされず

京の花あづまでちらす隅田づゝみ

つかもねへ碑ハ親玉へいゝ手向ッ

笑ひ草花は小菊にさくばかり

仲の町植る榮花の夢見草

老萊(五三・12、青露)

萱子

風松

三輔

我虫

三輔

集馬(九九・87)

文志

麴丸

小丸

杜蝶

柳葉

迎茂

巨眼

旭山

春駒

水魚

壽留女

素盞鳥も舅ハ足手がらみなり(論鳴)

横櫛も月のさし入ルさくや姫

二ツなき三國一の四方面ッ

土手一ッへだて水鳥駕の鳥

碑の會も三十七とせの忌に當り

眉墨の青キハ夏の二十ナ山

長安の酒家一ナ旦那李白様

水鉢へ久助も出るよし野丸

枕席をとにもにせずして文をかき(シヤキ)

……【100・131】

木もなくて富士ハ尊き形ナなり

すゞ風は鳩の浮キすのゆれる度ト

夏座敷美濃をはづして伊与を懸(豫九八)

指づかをつくべきほどの艶次郎

雨に名をふる辛崎と唐の奈

風流の梁(カズリ)となる川柳

梅若の土手で吉田のすり火打

つれづれ草ハ根をほるが仕廻ひ也

新シ木が出来て芽をふく枯柳

杜蝶(125)

吳竹

全

要

魚交

春駒

水魚

叶(無九七)

(九九・118)

三枝

魚交

乙丸(資九八)

(九八・61)

綾丸

亦樂

山笑

錦糸

水鏡

■

針箱へ置まとハせる一朱判

今蝶のたはふれた葉を菴の汁

灸点のふじも膝から七合目

名代ハ蚊屋のあなたに合歡チアの花

鯛麵をせり出しにする裏階子

馬になる日あり雪(雪)のわかいもの

あんまりよくも來やせんと先△九七すわり

殺し文句で幽霊が月の事

相馬御所四ッ足門△や(九八)にひゝん殿ン

……【100・132】

上総木綿を見とがめた秩父絹

手のくぼの心で蜆シヌ子あみを喰ヒ

八景ハ置キ土産なりさくや姫

叩マクく戸に壹合升の人見穴

によいと出た良が三國一の美女

富士を枕に大天窓ねらふ也

雷イ海へ落チ助ケ雲ク

行くハ案ミ子にすべき蓑と笠

うすどろでもゆる妻戸に水の印シ

麴丸

巨眼

巨眼

巨眼

カスミ(九七・20)

清尿

二葉(九七・29)

未青

風松(九八・46)

佀(九七・12)

瘤泉

松哥

早聽

佀

雪下

都友

古扇

芋洗

新猫でじやらついてゐるちくしやうめ

福ろく壽蚊屋へ尻からむぐりこみ

間夫が來て行燈を消ヌ女護じま

左太郎へ茶を懸て喰ヒ居ハ

秦の代の芝居下官ハ鹿の足

治世の軍學おれならバユウするて

五右エ門風呂蓋も此世のうき沈△九八ミ

いたくな泣△九八きぞ承知だと淺黄もて

鉄槌で徒然草をこまかにし

……【100・133】

戸張りの不二へ姫のりの雪がふり

秋はてゝ寐るハ案(山)ミ子のつかれ武者

酒を止メたれどやつはり錢がなし

幽霊の聲色つかひ弓をもち

行ウ水に水を用ゆるすいた晩

祭礼に釜で汁たく筑厂村

傳吉ハ無常の水にさそはれる

可愛イ子には旅でもと藥△九七リ喰ヒ

芋汁ハ安録(マ)山が喰ヒはじめ

春駒

吳竹

升丸(九八・41)

梅舍

帆布

柳泉

未青

狸声(九八・65)

亦樂(九七・1)

猿松

五毛

佀

柳泉

牛住

貫雨(九七・34)

升右(石(九八)・79)

魚交(九七・40)

木賀

よく堀て聞ヶバ和尙の火けし壺

エ、やつとで乗りおほせたら赤兔馬^(まことめ)

土器に投ヶられてゐるへば隠居

兄娘を土左衛門にする馬鹿りちぎ

其鼎古^{又古金}かねが又買^かひかぶり

人が降たと洗たくを止^{△(九七)}めてにげ

稻光り夜鷹の鍼^{シラ}をちよいと見^{△(九七)}せ

下女がアヤ震動こいつ池ぶくろ

御夜具^{大尾}拜領裏門へ賀^{て(九七)}した使者

.....134

川柳評

御親敬イ長生殿江御立寄

御開運佛花を門トへさゝせられ

日の本ハ神代のまゝの時津風

わが君子國に諫鼓のもふけなし

梅へ義理ひらく覺悟で二度違勅

八幡知る君は藪にも剛の者

先ッうたに唄ヒ加藤を乗せ給ひ

人ン道ッの慎ミ信シの一字なり

風松

百太

辻茂

十九丸^(九八・60)

南豊^{(九八・78)(128)}

三輔^(九七・3)

風松^(九七・18)

雞肋^(九七・34)

佃^(九七・11)

空色にすが縫をした晝の月

戦ハぬ日にもがんちで軍書見る

降れよ晴れよハ緋^{と(九七)}の袴緋の衣

身にしみる御慈悲ひやり御手水

纓^エをとらせてあかるみへ出さぬ恥

恩愛と慈悲でたゆたふ御赦の船

唐で見し月を時雨の亭ンでほめ

かきたてゝ出せばあかるき御捌キ

延喜の代恐れる出臍柘榴鼻

.....135

九郎兵衛が武功ぬれ手であはぢ嶋

車の前で泣そふな乳の吟味

鷹となる氣ざし草履をぬくめ鳥

上ミの句が遅イと弦ルが切^{は(九七)}れるとこ

兵糧は敵に喰^{は(九七)}せた御智畧

小手のきく攝家左官に御轉任

海ニ入ルみさを山で御したひ

永キ代を猿骨折ッて寅がとり

御愛樹の外で百首へ入らせられ

長物

赤奴

芋洗^(九七・32)

水鏡^(九九・108)

是成^(九九・89)

杜蝶^(九七・29)

三輔

貞龜

佃⁽¹²⁵⁾

木賀

叶

木卯

里扇

集馬^(九七・13)

株木^(九九・120)

佃^(九九・104)

井

辻茂

御仁政波瀾へとゞくゆるし文

日の光り荒にし山の二字が消え

發言ンハ政宗きれた御こたへあゝさつ(九八)

川と池水から秘佛二鉢揚ケ

曲事とハまげぬをしへの御條目

内藤ハ隅ミに置れぬ御家がら

御仁政初霜の句で縄がとけ

牽せし牛に召給ふいたましき

近江のハぜゝ大江戸ハかねの城

……【一〇〇・136】

孫の世で足ハはを(九八)こバぬ御殿山

晴レタ霧皮むくやうに瓜生山

豆腐屋の下駄を又はく木薬屋

源トが清く四海ににこりなし

雷△鳴△(九九)イを大キな耳へ聞ておぢ

紫でみる薄雲の遠筑波

御櫓を合圖あふぎて請こたへ

朝かほで千代万代に名を残し

三人は文珠に并べ和哥の才

芋洗(九七・五)

三輔

綾丸(九八・80)

子志安(122)

麴丸

株木

文水

鶏肋

△廣

板常(九八・81)

早牛

老萊(九八・55)

木卯

十九丸(九九・117)

扇風

水治

幸司

株木

みの箱をもたぬで哥の種を取

良禽ハ松が根による関が原

注ッも極ッこまかに伊勢の古事記傳

御残念既に讒者も時にあひ

鯉を喰ヒ鴨を助ける料理人

建久四優曇華富士の裾に咲

改元を始で知ッた赦免狀

渡辺に駕籠はなきやと源三位

心なく櫻をまたぐ愛宕下

……【一〇〇・137】

讀し(九七)かけて胡蝶の巻キを夢の筈(苦)

機道具車に三度孟母つみ

鶏はうた蛙ハ法で封じられ

勇士一トくせ武者ぶるい義に泪

過分ぞと御言ばうるむ血の達尸

六尺の杉戸七尺去ッて燃え

珊瑚珠の下駄を今なら召ス所ロ

五関の番兵赤免馬かねてにげ(はきとめ)

小牧山猿の生キ膽ぬく所ロ

堅丸

叶

杜蝶

風松

品能

巨眼

松鱸

風松

南豊

青陵(九七・13)

松歌

コセイ

青志

叶

梅鳥

亦樂

株木(九七・11)

夢中

御茶壺の道筋に先ッ數寄屋橋

三國へひゞく虎溪の高わらひ

千に武者百には僧の山ざくら

下総も今にげ水の片男波

獵犬シの忠死は藤の榮えなり

コロ谷ニで孔明司馬を燒氣也

惡くちの袖をひかへて大江山

其當座式了が夢に鳩の月

絶景に時刻を移すかゞみ山

……【100・137】

落涙數行照君は胡馬に乗り

梅ぼしハ都へもどる安樂寺

御手料理榮花の夢の覺はじめ

文字が関はき出ス砂子鳥の跡

玉の皇子を里ッ子に莫耶とり

檜扇の陰から覗く初冠り

消残る雪黒髪のお白髪

蛇ハ寸ンにして坪割の蝦夷錦

琴をきゝゝ馬柄杓へ月を汲み

迎茂

糸人 (九八・66)

佃

一口

叶

品能

三輔

柳糸

一路 (九八・76)

狸声 (九七・10)

老萊

丸齋 (九八・81)

松鱸

雞肋

水鏡

未青

木卯 (九九・89)

柳糸

雨夜をバ紫女もぢくゝ書かゝり

四天王金剛杖で栗をむき

うづもれぬ異名後にハ堀となり

いたいけさ禿奥齒に親しらず

去年見た花を湯で吞ム隅田の土手^(九七・九七)

富士からも見えそふなもの日本橋

白川と志賀は妄語と邪嬭^(七)戒

三味線をひくハ佐竹の小荷駄也

契情のけんなるハ客うらに來ず

……【100・139】

和訓のいらぬ惡体ハ馬鹿阿房

みそ摺坊主田樂の雇ひ武者

むごらしい事ハ達厂の入院なり

出來秋の一駄ははるの一トつかみ

船からぽんと厂首の銀左エ門

火起證の鉄火を焼も熊野炭

釣ルかやも鱗にのこる子の朝寐

權三が見世で聞てゆく鐘が洩

下戸自慢御譜代酒ハござるまい

梅丸

松下 (九七・35)

松虫

笑魯 (九七・33)

風松 (九七・21)

草季

叶

集馬

△廣 (九八・41)

瘤泉

よしほ (九七・20)

平口

加丈

木賀

清屎 (九八・64)

柳糸

柳泉

巨眼 (九九・91)